「1930年前後の上海」

日中の交流にふれて

文芸評論家・日本ペンクラブ会長　尾崎　秀樹

今、ご紹介いただきました、尾崎秀樹でございます。ご紹介の中にもありましたように、戦後、台湾から引き揚げてまいりまして、当時の台北帝大に在学中の私は愛知大学に転校するところでした。私は愛知大学に学んで、卒業することになったかもしれません。しかし理科系だったものですから、法文系中心の愛知大学には入れなくて、そういう意味では、たいへん残念だった思い出がございます。

愛知大学の前身である東亜同文書院については、若い頃から憧れを持っておりました。それというのも、上海で私の兄（秀実）が一時期、上海在住のいろいろな人たちと交流を持ち、そして東亜同文書院の学生諸氏とも交渉を持ったからであります。限られた時間でどのくらいお話ができるか、いろいろと当時のことを申し上げてみたいと思います。

実は、1992年の暮れ、12月10日・11日のことですが、上海で二日間にわたって、アグネス・スメドレーの生誕百年の記念集会が行われました。アグネス・スメドレーが生まれてちょうど百年、スメドレーが戦後亡くなったことを考えますと、芥川がちょうど生誕百年だったのにくらべて、つい先ごろのような感じがします。この集会は、上海の国際友人研究会が主催して、世界各国のスメドレーと交友関係のあった人たちを招いて、記念集会を行いました。日本からは石垣綾子さんが出席され、私も出て、スメドレーと尾崎との関係を話した次第です。

会の主催者は、若い世代が、かっての中国との国際的

な交流・友好、そしてまた日中戦争の渦中で、解放戦争に協力してくれた、国際友人の仕事を若い世代が何も知らない、それを非常に残念に思って、この集会を開いたのだと言っておりました。

そこには、有名なイツラエル・エプスタンとか、ルートワイス、この人も1930年代から上海で活躍していた人ですが、そういう人たちが現れました。あまり横で労ったりしますと、「私は一人で歩ける」と言いながら胸をはって登壇し、いろいろな話をしたわけですが、この国際友人研究会というのは、3S研究会が母体になっております。3Sというのは、スメドレーのSとエドガ・スノーのS、それにもう一人アンナ・ルイズ・ストロングのS、3人のSを取ったもので、その発展の中で、更に国際友人としての人々を顕彰していく仕事を続け、日本の関係者にもその輪を広げていきたいということでした。

スメドレーの住んでいた上海の旧居は、三ヵ所ほどございます。長く住んだ南路の185というところ、この二階に住んでいた時期がありますが、今回その旧居の角のところに記念碑が掲げられました。"アグネス・スメドレーの旧居"という次第です。

スメドレーが、中国に第一歩を刻むのは、1928年12月末のことです。シベリア鉄道経由で、満州里に入りまして、元旦には哈爾浜に到着し、奉天（瀋陽）から南下しながら、三ヵ月ほど華北地区で過ごしました。各地を転々として、日本がどの程度まで、鉄道や行政機構、それから工場や土地などに対して政治的、経済的な支配力を持っているか、その進行の実情を探り、それを、当

文芸評論家・日本ペンクラブ会長

●

尾崎秀樹

日本文藝協会常務理事・日中文化交流協会
常任理事・大衆文学研究会会長

プロフィール
1928年台北に生まれる。
台北大学（医学専）中退。
主著に「ゾルゲ事件」「魯迅との対話」「旧植民地文学の研究」「大衆文学論」「歴史文学論」「峠の人中里介山」「夢いまだ成らず山中峯太郎」他。
芸術選奨、吉川英治文学賞、巌谷小波文学賞他を受賞。

時契約を結んでいた、フランクフルター・ツアイツング紙に通信記事として送ります。スメドレーがこの中国に第一歩を印した1928年12月末、それより一月ほど遡って、尾崎秀実も上海に渡って行きます。

1928年というと昭和3年にあたりますが、この11月のことです。尾崎は、朝日新聞の上海通信部（後に上海支局となりますが1928年段階では上海通信部です）へ転勤となって、大陸に渡るわけで、それまでは大阪朝日新聞社の支那部に勤めておりました。

神戸を出港してから、三日目の午後に揚子江に船は入り、黄浦江へ入って行くわけですが、その時の感動を尾崎はその後、はっきりと書き留めております。それは、ゾルゲ事件で検挙されて、獄中からの妻子に宛てての手紙の中で言っていることなんですが、「宮崎滔天が始めて揚子江を遡って上海に入ったとき、何とも知れず感極まって泣いたと書いてあることが同感出来ます。私も最初に上海に入った時の感激は、一生のうちの最大のものの一つです。」こういうふうに言っております。

宮崎滔天は、申すまでもなく、中国の民国革命に協力した志士でもあるわけですが、滔天はこの明治25（1892）年の5月に長崎から西京丸という船に乗って上海に入っております。その時滔天は22歳。本当にその時にも、呉淞の一角を望みながら、「水や空、空や水、雲、陸に連りて、陸、水に浮ぶが如きもの、これ支那大陸なり」と、「三十三年の夢」で書いております。中国へ渡り、上海へ入って来るときの、その感動を尾崎も共に偲びながら書いているわけです。

尾崎にとっては、中国は決して異郷ではありませんでした。というのは、生まれて間もなく父の赴任していた台湾へ渡って、そこで小・中学校時代を過ごしているからです。一高に入ってからは、東京住まいになり、さらに東大に学ぶわけですが、大学を卒業して、朝日新聞社に入社いたしました。当時は東大法科を出た人たちは、ほとんどは官界に進む、そういうエリートコースを辿る人が多かったのですが、尾崎はそれに対して、新聞記者を志して朝日に入りました。

そして朝日に入って間もなくのことですけれども、ウイットフォーゲルの「目覚めつつある中国」という本を読んでおります。これは原文で読んだのか、あるいは訳著もその頃出ておりましたから、翻訳だったのか明らかではありません。この本は上海における日本の紡績工場のストライキで、銃殺された中国人労働者の犠牲から筆を起こしているんですね。そしてまた、中国の過去・現在の運命の、いわば経済的社会的な原因を原則的に追究することができれば、将来の事件の批判に対しても、ある種の根拠が得られるであろうということから、説いているわけです。そして五・三〇事件の反帝国主義的な、そしてまた、反植民地運動の本質にも触れて、中国の民衆が外国の帝国主義に対して行った反抗とは何を意味するのか。目覚めつつある中国の反抗は、アジアおよびヨーロッパにおける資本主義的な支配に対する、決定的な意義を持つものである、ということをウイットフォーゲルは強調していたわけで、これを読んで、尾崎は非常に

写真：アグネス・スメドレー
（「大地の娘」ドイツ版より）

私にとっては出身地たる台湾以来、切っても切れない深い関係がありました。ことに1925年以来のいわゆる大革命の時代は、一つの出来事が深い興味を呼びました。左翼の立場からする、支那問題の把握は完全に私を魅了しました。私にとってはむしろマルクス主義の研究が支那問題の関心を誘ったのではなく、逆に支那問題の現実の展開が、マルクス主義理論への関心を深めるといった関係にあったのです。上海は左翼の立場からいえば、帝国主義的諸矛盾の巨大な結節とも言い得られました。また、そこにはなお1927年までの左翼主義の高潮の余波が完全に残っておりました。文芸左翼の一団である創造社のごときはその一例であります。私はこの上海にあって当時若さと未熟な情熱をもって、完全にこの環境の虜となっていったことは、振り返ってみても、極めて自然に思われるのであります。私は上海において、初めはごく初歩的な小さなグループ運動から、遂に最も大きな国際的な左翼組織に入って行きました。」と言っております。尾崎はまさに上海において、大きな現代史の激動の中に、ぶつかっていったと考えられます。

その尾崎が、大阪朝日新聞の上海通信部に赴任したときには、先輩で森山喬さんがおりました。この事務所は、赫司克而（ハスケル）路の52号というところですが、当時上海には、大阪朝日の他（東京朝日は上海に支部をその頃は持っておりません）、大阪毎日新聞、時事新報、強く惹かれるものがありました。それだけが原因というわけでもないでしょうが、かねてから思っていた中国に対する関心が強まり、より深く意識的に思うようになったのは、この本を読んでからだと思われます。

東京から大阪本社へ、しかも学芸部から支那部へ籍を移すことになったのも、その一つの現われです。そして大阪では、大原社会科学研究所を訪ね、そこで細川嘉六さんが中心になって、中国革命の研究会をやっておりましたが、その会に加わって、目覚めつつある中国に対する関心を深め、中国の現実に触れていきたいと考えるようになったわけです。

尾崎は、こうして上海へ渡ってまいりますが、後になってはっきりと、獄中で書いているのです。

「支那問題（当時は支那といっておりましたが）は、

報知新聞の上海支局、それから上海毎日、上海日日、上海日報、上海通信社のほかに通信社として、日本電通、それから新聞連合、江南晩報などがありました。

そして、上海日本記者団というものを作っておりました。その中で尾崎が深い交渉を持つのは、上海通信社をやった日森虎雄、大阪毎日のベテラン記者であった沢村幸夫、上海毎日の船越寿雄、それから魯迅の翻訳なんかもやっている上海日報の日高清磨瑳、それからまた、上海新聞人の生え抜きともいえる江南晩報の山田純三郎ですね、こういう人たちがおりました。

尾崎は同僚の森山喬の世話で、呉淞路の義豊里というところの古着屋さんの二階に住むことになりまして、そこで下宿をいたします。

尾崎は、中学時代に学校が企画した旅行に参加して、香港と広州を歩いたことがありました。しかも、小・中学校時代を台湾で過ごしたということで、非常に深く植民地支配の実態を、生活を通して見ることができ、それが民族問題に深く係わっていく土壌にもなったわけですが、その尾崎は、上海に来て何か目を洗われるような思いになります。そしてまたその周辺の自然の素晴らしさ、江南の春の素晴らしさにも目を見張っております。

上海郊外の龍華の桃の花だとか、呉淞の長江のほとりの青草の一面に続いている野原、南京の紫禁城のあたり、さらには蘇州だとか、杭州の西湖のほとり、その風景を思っただけでも胸が躍る、ということを後でも言っております。そういう思い出もいろいろありましたが、やがて上海の通信部が通信局に変わるころから、積極的に取材活動を行うようになります。

森山喬に代わって、太田宇之助が支局長になって来るわけですが、この支局のあった赫司克而路52号というところは、日本人のわりあいに多く住んでいた北四川路にも近いところでして、二階建ての洋館の一角、その下が事務所と応接室になっていて、上に支局長の住まいがあるというようなところなんです。太田宇之助は、尾崎の当時の仕事振りを、いろいろ回想したものを残しておりますが、その中で「尾崎君は、猛烈な読書家で毎月の内山書店への支払いが大変だった」と、書いたところがあり、若いサラリーマンに身分不相応な量の本を次々に買い込んで、その支払に苦労していたと言っております。

写真：上海時代の尾崎父娘

確かに尾崎は内山書店に毎週のように顔を出して、いろんな本を買い込んでおりました。

それからまた、九江路にドイツ系の時代精神書局（ツァイト・ガイスト）という本屋があって、そこのイレーネ・ヴェデマイヤーという女主人とも親しかった。これはスメドレーとの関係もありまして、尾崎を紹介する一人になるんですが、イレーネ・ヴェデマイヤーのところからは、外国の文献をいろいろ取り込んで、日本では当時は厳しい弾圧が三・一五、四・一六と続き、いわゆる左翼文献は、日本では合法的には入手できない。そういう中で、上海ではいろんな文献を自由に読むことができた点では恵まれていたわけです。

中国に来る前から尾崎は、上海は、列強帝国主義、外国資本の特権と利害が交錯するような、最大の拠点であり、中国の労働者がその力を発揮しつつある、国際都市であるという認識を持っていました。その尾崎は、北伐軍が兵を三軍に分けて三つのコースをもって、北上して以来の、いわゆる国民革命の推移というのを、日本にいる当時から、深い関心を持って見つめていました。

その経過は申し上げるまでもないと思いますが、深い関心を寄せながら、日本では、なかなか状況をつかみにくい状態にあったわけですが、中国から伝えられるニュースにも偏りがある。日本の側にも情報を規制する動きがある。だからなかなか状況がわからなかったのですが、上海へ特派されたときには、既に第一次の国共合作が終わって、状況は革命から反革命に転じていたわけで、しかし、上海にはまだまだかっての革命的な潮流というものが強く残っていて、その雰囲気に取り込まれていろいろな情報に接し、尾崎は生き生きと活躍していった感じがいたします。

内山書店での書籍購入費がかさむ一方で、支払いも容易ではなかったと思いますが、その上海では、日本と違って官憲の目を気にしないでも済むという利点もあったと思います。内山書店が北西川路の魏盛里の路地裏に店を開くのは１９１７年のことで、もともと目薬の宣伝のために家を留守にすることの多かった内山完造は、奥さんの美喜さんのために、何か気晴らしになるような内職はできないものかというので、自宅の玄関先に本屋を店開きするところから始まるんですが、当時は、日本人の書店は上海には三軒あったという記録が残っております。それはともかくとして、やがて内山完造はしだいに本格的に本屋を営んでいくようになりますが、その一方で、上海のYMCA主催の夏期講座を計画したり、自宅の真向いにある空家を買い求めて、独立した書店を営むようになり、その前後から日中文化人たち、文芸愛好家たちが、この内山書店を溜りにするようになります。やがてそこで、中国劇の研究会がされたり、漫談会が催されたり、文芸漫談会にまで発展していきます。内山書店の内山サロンも、後からできますが、そのようにして、ひとつの日中文化人の溜りになっていきます。

漫談会に顔を出す中国人には、日本に留学したことのある青年が多く、演劇の世界でも、先駆的な劇作家である田漢だとか、欧陽予倩、あるいは鄭伯奇や謝六逸という人たちも、また郁達夫や郭沫若などもやがて現れるよ

うになるわけです。

内山書店の文芸漫談会に出席した田漢は、東京高師の出身ですね。それから、中国で演劇運動に従った劇作家鄭伯奇は、京都大学の文学部に学んだ小説家でした。欧陽予倩は、早稲田大学に在学中から新劇運動に志した劇作家でして、帰国後、新劇同志会だとか民衆劇社などにも関係しておりました。

謝六逸は、早稲田大学の出身で、復旦大学などで教鞭をとったことのある、日本文学の研究家・翻訳家ですが、こういう人たちが、次々に内山書店のサロンに顔を出すようになりました。

そして、例えば郭沫若氏の場合には、国民党の四・一二のクーデター、いわゆる国民党の反動が起こった当時、国民党の軍政治部副主任の地位にあったわけですが、蔣介石の支配下の南昌を脱して、上海に戻って、一時この内山書店に身を寄せたこともありました。国共分裂直後の南昌蜂起、八一革命と言われる、これにも合流しているんですが、蜂起が敗北した後には、山中放浪のすえに、香港を経て上海に戻り、またまた内山書店で庇護を受けるというような、そういう人たちもいたわけです。上海には、安娜夫人と4人の子供がいて、その内山完造の世話で、上海にしばらく潜伏した後、別の筆名などを用いて、〈文学革命から革命文学へ〉の主張を行い、翻訳なども出しますが、国民党の追求が日毎に強くなってきたこともあって、身辺の危険を感じて、1928年2月には妻子と共に今度は逆に日本へ亡命することになり、その後9年余にわたって日本での亡命生活が郭沫若には続くわけです。

そこで魯迅先生が、広州から許広平と共に上海に到着するのは、ちょうどその時期、1927年10月のことです。

尾崎やスメドレーよりは、1年早いわけですが、その魯迅は、愛多亜路（エドワード）の長耕里にあった、ある旅館にひとまず旅装を解き、その後、東横浜路の景雲里で、許広平と初めて同居生活を始めるわけです。その景雲里に住まいを選んだのは、考えてみると、3番目の弟にあたる周建人が、その近くに住んでいたこともあったんでしょうか。

その景雲里の一画は、上海では路地のことを、弄と書きます。北京でいう胡同という言い方ですが、あの弄の中に周建人が住んでいて、ほかに葉紹釣、「小学教師」の作家です。その葉紹釣なども近いところにおり、魯迅はその地を選んでそこの一つ奥の、二弄というところに新居を構えるわけです。翌年には近くにまた、移っております。

そしてその初めの家は、のちに龍華事件の犠牲になる柔石という愛弟子に譲っていくのですが、魯迅の旧居として、上海で公開されている大陸新邨の家、施高塔路・9号に移るのはずっと後で、1933年のことです。魯迅の故居として公開されているところです。

その魯迅が、内山書店に来たのは、上海に移ってきて2日目のことです。本当に内山書店には早い時に姿を現している。その時の印象を内山完造は書き留めているんですが、「2、3人の友人を同伴した一人の藍色の長衫

を着た小柄ではあるが、トテモ特長のある歩き方をする、鼻下に黒い濃い髭を生やした水晶のように澄んだ眼をした、ドッシリとして小柄にも拘わらず大きな感じのする人が魯迅だったと言っておりますが、その魯迅は、上海に来てからは、いろいろと激しい文芸論戦も続け、その革命文学やプロレタリア文学を、競合する新鋭の批評家たちと、魯迅は渡り合いますが、中には時代遅れの小資産階級文学だ、と言って、決めつける先走った左翼の文芸批評家も少なくなかった。魯迅は普通だったら身をかわすようにしていくところでしょうが、決してそういうことをする人ではなかった。むしろ、それにまともに対応して、論争を通して、自らも戦闘的な文学者に成長していったところがあるわけで、それはまさに論敵の匕首を借りて、相手を倒し、批判を通して自分の方向を築いていくという、そういうやり方だったわけです。

その緊張した日々の中にあっても、内山書店にはよく出かけていって、雑談する。それは魯迅にとっては、ささやかな憩いでもあったわけで、わりに景雲里の家から、魏盛里の内山書店までは、歩いて10分もかからないくらいのところで、そこで、片隅に設けられたお茶の席で雑談に時を過ごすことが多く、北四川路のつきあたりのところへ移ってからも、本棚の横の一角にテーブルがあって、そこに魯迅がいつも座っていて、それが魯迅のサロンになっていた。その北四川路の表通りの場所に内山書店が出るのは、１９２９年末のことですが、そのころから新築の住宅のその裏のほうへ、広がってまいります。尾崎も内山書店の常連の一人だということを先程申し上げましたが、ここで中国の作家や評論家と会うこともあり、創造社系の作家たちとも親しくなっていきます。

なにしろ大阪本社からの取材の依頼は、たいしたものじゃないんで、尾崎の関心とは大分ずれておりまして、俳優のダグラス・フェアーバンクスが上海にきて、その時の歓迎パーティへ出席して、取材しろとか、大体新聞社はそういうものかも知れませんが、当時はそういう命令を受けて、渋々と出かけて行ったりしています。ちょうど北京西郊の、香山の碧雲寺に置かれていた孫文の遺体が、南京中山稜に移された１９２９年５月のことですが、その時には、勇んで取材に行っております。

そして犬養毅さんに直接会って、いろいろと取材しているんですが、そのときに頭山満や宮崎龍介にも会い、犬養健にもこのとき会っている。それ以来、尾崎と犬養健との付き合いも始まるわけですが、それはともかくとして、尾崎はいろいろとその当時の人たちとの交流を深めていきます。

スメドレーが中国の地を初めて踏んだのは、１９２８年12月の末だと申しましたが、彼女は、やがて上海へ現れ、そこで尾崎と会うのは１９３０年のことです。上海の南京路の角にある、パレスホテルのロビーで会ったのが最初で、大変厳しい、逞しい女性だったようです。スメドレーと最初に会った時には、いきなり挨拶は抜きにして、彼女は中国の農業問題について切り込んできた。普通の時候の挨拶なんかは、別にする必要はないわけですが、いきなり中国の農業問題について日本人の研究にどういうものがあるのか、というようなことを聞かれて、

度肝を抜かれたという話を書いております。スメドレーとの交渉はこうして始まります。

スメドレーの厳しい表情の写真がありますが、それはアメリカの荒野が産んだ、そして時代の苦悩の中に研き抜かれ、鍛え抜かれた、表情なんだと尾崎は書いているくらいです。実際に彼女と話し合うことによって、多くのものを知ることができたし、ジャーナリストとしての仕事の上でも、いろいろと影響を受けました。

こういうときに、今度は、夏衍という劇作家も日本から帰ってまいりました。1927年5月、夏衍は7年日本に滞在して、明治専門学校（今の九州工業大学）に学んで、卒業後も日本に留まり、東京で、国民党の日本総支部の常任委員や、組織部長として活躍していた人です。

そして7年ぶりに帰ったときは、四・一二のクーデタの後で、状況が一変しておりました。夏衍が期待していた指導者たちも、殆ど上海から姿を消すか、地下に潜っている状態で、生活のためにいろいろ翻訳をやったりしますが、やがて明治専門学校の同窓生の鄭漢先の推薦で中国共産党へ入党します。

夏衍は、中国共産党の閘北地区の第三街道支部に所属して活躍するようになるのです。この街道支部の組織の責任者というのは、「死せる阿Q時代」という魯迅批判を書いた、銭杏邨でした。

その組織には、戴平萬だとかいろんな人たちがいたわけです。夏衍はその上海の東部一帯を担当して、いろいろと楊樹浦の工場地区に、作業服に身を変えて出かけていって、労働者の間をいろいろと工作するようなこともありました。

その後の時期には、左連の結成へ向って、夏衍も工作しますが、中国の左翼作家連の結成は当時の一番の課題だったわけで、魯迅を抜きにしてはこの結束は図れない。そこで夏衍は、粘り強く交渉して、魯迅の参加を得ることに成功します。この創立準備会から魯迅を軸として、組織作りが行われ、やがて中国自由運動大同盟なども結成されるようになりました。

その詳しい経緯を述べると、それだけで1時間や2時間はかかってしまうので先に進みますが、その結成大会の席上で魯迅は、「左翼作家連盟への意見」と題して記念講演を行います。当時はまだ中国共産党の中央は、いわゆる李立三コースといわれる、左寄りの路線に強く規制されていて、その影響下にあった左連も、それを否定できなかったわけですが、魯迅は左連成立の前後には、秘密裏に李立三と会ったりしています。

その時、どういう話をしたかよくわからないんですが、李立三失脚のあとには、王明の指導の時代に入っていきますが、魯迅はそういう中にあっても、毅然として自分の論を貫いていきます。

先程いった自由運動大同盟が発足すると、国民党の浙江省党部は、魯迅に対して逮捕状の申請を中央政府に出し、自由運動大同盟への弾圧を加えてきますが、そういう情報をいち早く知った魯迅は、その危険を避けるために、住まいを出なければならない状態になります。

一人っ子の海嬰という子はまだ一歳になっていないのですが、妻の許広平とも暫く別れて、一人この内山書店

の中二階へ避難します。

そして暫くそこでいて、今度は、さらに内山書店からいうと筋向いのところにあるラモス・アパートに家族とともに移ります。魯迅逮捕の噂というのはその後も何度かあって、危険を感じて避難しなければならない事態が起こり、文章を書くより逃げることに忙しい魯迅だと言われたこともあるほどです。その当時の文芸左翼の動きは、いろいろと活発な面があるんですが、夏衍は、さらにこの左連の組織作りに参加して、その運動の推進に力を入れるだけでなく、中国におけるプロレタリア演劇の発展のためにも貢献いたします。

それで多くの進歩的な文学者や、演劇青年たちが芸術劇社に結集して、その中核には先程も名前の出た鄭伯奇とか、馮乃超とか、陶晶孫、許幸之、叶沈というのがありますが、鄭伯奇が一応社長格に祭り上げられて、これで活発に活躍するようになります。

写真：北四川路の内山書店

日本で1929年に上演されたトレチャコフの「吠えろ支那」。これをすぐ持ってきたりしますが、芸術劇社は演出やなんかを手がけてきたとはいえ、まだまだ素人の集まりのような状態で、そこで本格的な公演としては、ロマン・ロランの「愛と死の戯れ」だとか、アプトン・シンクレアの「二階の男」、あるいはルメルテンの「炭坑夫」などというのをやりました。

そしてさらに2度目の公演では、レマルクの「西部戦線異常なし」を取り上げました。これは、映画も作られ日本でも改造社から翻訳が出てベストセラーになっておりますが、それに書き下ろしで馮乃超の「阿珍」という戯曲をやりますが、この二回目の公演は大成功でして、特に「西部戦線異常なし」は観客に強烈な印象を与えました。

ここにはスメドレーも取材にいっておりまして、写真を撮るためにフラッシュを焚いたんです。ところがフラッシュなんてものに馴染みがなかったのか、観客がみんな爆弾だと勘違いして、総立ちになり、我先に出口に殺到し大騒ぎになる一幕もありました。スメドレーの失敗ですが、その「西部戦線異常なし」の脚本を担当していたのが、陶晶孫です。陶晶孫も爆弾だと大騒ぎになって、警官までそれに誘発されてきますから、これは危ないということで、尾崎秀実のところへかくまわれるわけです。

尾崎の家に三日厄介になったと回想の中で言っておりますが、いろんなことが、ちょうどその時期に重なってきます。山上正義という人物がいます。山上は、192

5年に上海に来て、上海日報から新聞連合に移ったベテラン記者です。その後、広州へ派遣され、そこで郁達夫や成彷吾、王独清、穆木天などの人たち、つまり初期創造社の同人たちを知るようになりました。特に魯迅が厦門から中山大学に移ってきたときに面識を得て、インタビューをしたジャーナリストです。1927年12月11日に起こった、広東コンミューンの記事をいち早く日本に伝えてきたジャーナリストとしても知られております。

当時、香港と広州に支局を置いていたのは新聞連合ぐらいですね。だから他の社が取材して、記事にするというのは不可能なわけです。山上は魯迅と親しくなりまして、広州時代からいろいろと交渉を深めていくのですが、やがて、広州から魯迅の後を追うようにして上海へまいりますと、ここでさらに創造社系の人とも交渉を深めていきます。

尾崎をそういう人達に引き会わせたのは、山上だと言われておりますが、特に陶晶孫と山上、それに尾崎の関係は非常に深いものがありました。

郁達夫が「大衆文芸」という雑誌を編集していたんですが、郁達夫の後を引き継いだのが陶晶孫です。陶晶孫は、もともとは理科系なんですが、八歳で日本へ渡り九州大学や東北大学で学びました。生理学が専門です。帰国後、東南医学院教授になりましたが、その陶晶孫が「大衆文芸」という雑誌の編集を引き受けるようになるのは1929年6月からです。尾崎や山上を起用して、いろんな評論を書かせ、座談会にも尾崎を引っ張り出したりします。

山上は林守仁の筆名を使っておりましたし、尾崎は白川次郎の筆名を使う。それに欧佐起という筆名で、「イギリスはなぜ遅れたか」では、イギリスの社会主義運動を紹介したり、「日本左翼文壇の一瞥」では、日本のプロレタリア文壇と文学の動きを解説したり、いろいろなことをしております。

また、左連系の雑誌に寄稿するだけでなくて、集会などの斡旋をしている面も忘れられないことです。

夏衍がいろいろ書いている、思い出の中にも出てまいりますが、尾崎が左連の全体大会第二次で会場の設営にあたったことが触れられております。だいたい4、50名ぐらいの人数を、秘密の形で集めることのできる場所はなかなか容易じゃない。夏衍から相談を受けた尾崎は、日本人クラブを使おうと努めた。日曜日は混むけれどウィークデーの昼間はすいているだろうということで、その間会場の部屋を管理する中国人に少し暇をやり遊びに行かせ、午後6時位には混み始めるから戻って来るだろうからと、その間を利用して集会を開いた。左連の責任者にはあんまり大声を出さないでくれと注意したようですが、しだいに興奮した雰囲気の中で、大声で叫び「ソビエト万歳」「ソビエトを擁護せよ」とか、そういうスローガンを高々と叫ぶものも出てきてヒヤヒヤしたようですが、尾崎はそういうこともやっております。

それからまた、スメドレーもです。これまたいろいろと集会の斡旋をしたりしているのです。中国人がやるよりも外国人がやった方が無難だという、裏の裏をかくようなやり方です。魯迅の50歳の記念パーティが行われま

すが、このパーティは、フランス租界のオランダ・レストランで開かれました。すでに魯迅はラモス・アパートに移っていた頃ですが、左連成立の後の弾圧の厳しさは、弱まるどころかさらに加重されているわけで、招待されて集まってくるのも100人を超すに違いない。そうすると小さな会場では魯迅の50歳記念集会がやれないというので、スメドレーはいろいろと苦労した。フランス租界の呂班路50号にあった、オランダ・レストラン〈スラバヤ〉を選びます。発起人には、魯迅の弟子の柔石をはじめとして、馮雪峰や、馮乃超、あるいは許広平も名前を連ねています。

左連をはじめ、中国社会科学家連盟、中国左翼美術家連盟、中国左翼戯劇家連盟などの主要メンバーが参加し、魯迅の50歳の記念に集まりますが、かなり厳しい警戒体制ですね。

スメドレーはその日の魯迅について、「私が中国にいた全期間を通して、いちばん大きな影響を受けたその人に初めて会った」。実際はすでに面識はあったようですが、そう書いております。「彼は背が低くきゃしゃだった、クリーム色の絹の中国服を着て、柔らかい支那靴を履いていた。帽子は被らず、短く刈った髪の気がブラシのようにつったっていた…」というようなことをその日の印象として書いております。その時魯迅は、最後に答礼に立って、自分の半生を顧み、プロレタリア運動に参加してくれと言われているけれども、労働者、農民の苦しみ、希望を知らないで、プロレタリア文学を生み出すことは出来ない。むしろ若い世代に、それを期待したい。といったことをはっきりと言うわけです。同席していた若い一人の批評家が、横に座っているスメドレーに向って、「あんなこと言ってて、失望したでしょう。」とささやくと、スメドレーはむきになって怒るのです。「私は全面的に魯迅に賛成します。」と言って義憤を覚えたという一幕がありましたが、スメドレーは、職業的なインテリに対する終生変わらぬ憎しみを抱いておりました。中国のインテリは、何一つ肉体労働なんかやったことがないし、彼らの書くものは経験には無縁である。彼らにとって、この青年という言葉さえ学生だけを意味しているといい、労働者や農民に対して彼らは同情的ではあるが、優越的な態度をとっているし、プロレタリア文学の大部分は作為的であり、ロシア文学の貧弱な真似に過ぎない。といい、この若い批評家に向って「私は魯迅に対して諸手を挙げて賛成する」と答えてやったと述べています。

スメドレーはそうやって、魯迅の生誕50年の祝賀記念の裏の立役者としていろいろ工作した。尾崎の場合も同様ですが、いろいろな面での交流があったことがそのことからも分かります。

東亜同文書院は、その頃上海の西の徐家滙虹橋路にありました。この学校は、〈日中の共存共栄〉を建学の理想として1901年に東亜同文会によって創設されました。この書院に掲げられた使命は、政治経済の各面で中国事情に精通した実務家を養成することにあったわけで、その教科でも中国語の習得に多くの時間が割かれ、中国経済や、時事問題に関する学科も少なくありません

でしたし、毎年卒業を前に控えて、いくつかの班に編成されて研修旅行、大旅行が行われます。生きた中国見聞を身に付ける事が課せられたわけですが、私どもも若いときにはこの大旅行に憧れた思いがございます。

多くの人材をこの東亜同文書院は育ててきたわけですが、1930年5月には書院の創立30周年の記念会が催されて、前院長の根津一の胸像の除幕式をはじめ、風物写真、研究資料、所蔵図書の展覧なども行われて、学生も寮祭などを開きました。

それまでにも学生たちの間からいろんな要求が出ていましたが、その度に途中で挫折するような形になりました。しかし、創立30年を期してその要求が統一され、書院の根本的な改革を目指すという方向へ向います。

その時の要求は、学生の消費組合の新設、老朽教授の淘汰、支給品制度の撤廃などで、一度は教授たちの説得もあって決議を撤回するまでになって、学生側も休暇明けには協議会を開いて、いくつかの委員会を設けて解決策を講じようといたします。しかし、学生たちが強く要望した支給品の制度の撤廃に関してはお互いの話合いがつかないので、この年の11月に入って、学生は再び大会を開いて、全学ストを打ち出しました。その後の経過は、もうあまり時間がなくなってきたので、詳しくお話しいたしませんが、そのストライキは一週間ほどで中止になって、学校が基本的な要求をのみ、最後まで難航していた支給品制度についても改善されて、このストライキでは処分しないという一項があったために、学生側も無傷のままに終わります。その前後から、学園の内部にもいろいろ中国問題の研究会のようなものが設けられるようになります。

ちょうどこの時期、学園での運動が続いているころに川合貞吉も上海にまいりました。川合も中国革命に魅せられ、青春の情熱をかきたてられて大陸へ渡った一人です。川合は、田中忠夫、翻訳家の温盛光たちを中心に、中国問題研究会を作ります。田中忠夫は、経済学者で中国の貨幣制度の研究に本格的に取り組んだ学者でもありました。武漢政府に関係しましたが、その瓦解ののち上海に移り、「上海週報」に寄稿していました。この田中忠夫を主として、中国の農村問題や経済問題を語り合い、やがて王学文という学者を交えて、その弁証法的唯物論や、中国社会の特質などについても勉強しあうようになります。

王学文は、まだ30代半ばの新鋭の学者でした。15歳の時に日本へ渡って、前後14年を日本で過ごした人です。東京の同文書院、一高の予科から金沢の四高、京大の経済学部、大学院と学んで、河上肇の教えを受けた直系のマルクス経済学者です。王学文といえばその後、延安でマルクス・レーニン学院の副院長を務めた人でもあります。

王学文は、先ほどの話に出た中国自由運動大同盟の執行委員なども務めておりますが、すでに中国共産党員でした。日本で中国共産主義青年団に加盟し、1927年に上海に戻ってから間もなく、夏衍と殆ど前後して、中国共産党に入りましたが、この王学文をチューターとして中国問題研究会は組織される、同文書院内部にもそう

いう組織が作られます。

王学文は長く日本で過ごしただけあって、日本語も非常に流暢でして、しかも本格的なマルクス経済学者というのは、その頃の中国ではあまりいなかったわけです。その研究会には尾崎もまたチューターとして招かれることがあったんです。

学園内部で発行されていた雑誌（第二江南学誌）に所属していた安斎庫治（第27期）などが、尾崎のところに編集上のことについて聞きたいというので訪ねてきたりしました。やがて同文書院のOBまで含めて、中国問題研究会というものが組織化されます。

その実態は、もう少し調べなくてはなりません。なにしろ、王学文さんにお会いできたのが文革の十年が終わってやっと自由になった時でして、もう少し詳しくと思っているうちに亡くなられてしまいました。非常に残念だったんですが、この王学文から尾崎も頼まれて、共産党の江蘇省委員会で、中国社会の特質について論じ合うようなことも行っております。やがて、そういう研究会だけではなくて、しだいに外圧が加わってくる中国において、いかにして軍事的な侵攻に対決するかという問題から、実戦に踏み切るべきだという要求も出まして、日支闘争同盟が上海で組織されます。

写真：魯迅と内山完造

この日支闘争同盟には、中国共産党の組織下にあった外国兵士委員会というのがあり、これは直接に当外国の兵士や警察に働きかけるという部署ですが、そこに所属していた楊柳青が、中国問題研究会に働きかけて、そして実践的なグループにそれを発展させようというので、日支闘争同盟が組織されるのですが、ここには西里龍夫（第26期）、岩橋竹二（第26期）だとか、いろんな人も加わって、川合貞吉もその組織で動くようになります。

この宣伝工作は、上海陸戦隊の兵士に対して、反戦ビラをまいたり、いろんな活躍をいたします。

日支闘争同盟の動きも活発になり、同文書院内部には中国共産主義青年団も結成されるわけです。そういう中にあって、これに対する弾圧もその後で起こってまいりますが、その時期に魯迅は、同文書院で「無頼漢と文学」と題した講演を行っています。1931年4月17日のことです。これは、書院で毎週一回開かれていた中国語による特別講義で、魯迅は鈴木択郎教授の依頼を受けて講演しています。

それを聞いた同文書院の学生の中にも、記憶をとどめる人達は少なくないと思いますが、その草稿は残念なが

ら失われたままです。ちょうどその時期は、国民党による白色テロというものが吹き荒れた時期でもありました。講演の中でも、左翼作家連盟の作家たちに対する国民党の弾圧を非難したようです。1931年1月17日に、共同租界にある東方旅舎というところで、秘密のうちに開かれた会議で、30数名の者が全員逮捕されるという事件が起こりました。

その中には5人の左翼作家連盟のメンバーがいました。これは龍華事件というふうに言われますが、魯迅の弟子の柔石も殺され、丁玲の夫であった胡也頻も殺されることになります。唯一の女性作家の馮鏗がいますが、この人も銃殺されました。それが1月17日のことで、魯迅の依頼で柔石は、北新書局の契約書を預かりその写しを携えていましたが、魯迅にまで難が及ぶかも知れないということで、家族とともに魯迅は日本人経営の花園荘に移り、ボーイ部屋の中へ密かに身を避けるということも起こったのです。やっと2月28日に家へ帰り、そして4月17日には同文書院で講演をしている。そしてその後、4月25日には「前哨」という左連の機関誌に「中国無産階級革命文学と先駆者の血」という論文を書き、さらにスメドレーに頼まれて、「暗黒の中国における文芸界の現状」という文章を、ニュー・マッセズの求めに応じてまとめたりいたします。

テロ行為に対する激しい憤りというものを表明したわけですが、スメドレーがそういう抗議文を発表して、さらに身に危険が及ぶのではないかと心配すると、魯迅は「一向にそれは構いません」「危険が及んでも結構、誰かがそれを発言しなければいけないんです。」と言ったという一幕がありました。この事件に関しては、日本人もいろいろ動きました。その一つの現れが、1931年10月に四六書院から出版された「国際プロレタリア文学選集」の一冊である「支那小説集・阿Q正伝」という訳本です。この訳は、山上正義が林守仁という名で訳しました。これは共同で訳業を進めたわけで、尾崎は白川次郎という名前でこれに参加しております。

そして巻頭には、5人の左連の犠牲者たちに対する追悼の文章を掲げて、この白色テロに果敢な闘争を続ける中国左翼作家連盟に捧ぐと同時に、銃殺された人たちに対する追悼の意をそれに託し、同時に国際的な世論に訴える仕事を「阿Q正伝」の訳業を通して行いました。

「阿Q正伝」だけでなくて、処刑された国民党の血の政策の犠牲になった人たちの短編もそれに合わせて収録しております。「阿Q正伝」の日本訳は、これが最初です。刊行は、別の訳の方が少し早かったようですが、ともかく積極的にこの仕事を進めることで、国際的な世論

写真：景雲里23号の家での魯迅

にも訴えるキャンペーンとして役立てるという意味では、この「阿Q正伝」の訳は、歴史的な意味を持つものです。

尾崎はそこで、左翼作家連盟の宣言なども紹介しておりまして、はっきりとその時代に対する怒りを示すわけですが、実際それから間もなく、満州事変いわゆる九・一八事件が起こり、戦禍は上海に及んでまいります。その中にあって、尾崎やスメドレー、あるいは少し遅れてきたリヒアルト・ゾルゲなどが連絡を取り合い、中国のおかれた状況を探るようになります。

1993年10月16日・名古屋朝日ホールにて開催された
東亜同文書院大学記念センター発足記念
愛知大学文化講演会より収録

ゾルゲは、表向きは「社会科学雑誌」の寄稿家ということになっておりました。その前からコミンテルンの上海での連絡センターというのがあり、ウェデマイヤーのやっていた「時代精神」書店がその拠点になっていましたが、上海での組織が弾圧され壊滅状態になっておりましたが、ゾルゲは上海に来て、そして尾崎やスメドレー、川合貞吉、山上正義とも連絡を取りながら、日本の大陸侵攻を見守ることで、ひとつの情報収集の仕事をやりはじめるわけです。厳しい1930年前後の上海での動きは、まだまだそこに交錯する日本人はもちろんのこと、各国の人たちの動きがあるわけで、申し上げたのはその一面でしかないんですが、それを通してその時代の歴史の大きなうねりみたいなものを強く感じさせられます。スメドレーの生誕百年の集まりという事で集まった人たちは、そういう中をくぐり抜けてきた古い友人たちでした。

私は幸いに、この前後の動きを、上海に居住しておられる巴金先生の紹介で、いろんな人と会うことができて、その時代を知ることができました。

夏衍、丁玲、王学文、馬海徳にも会いました。日本の関係者ももちろんです。そして北京から西安、上海と訪ねて回ったんですが、その人たちの語る言葉を通して、当時の上海のさまざまな側面が、現代史の大きな接点になっていることが実感として確かめられたわけです。